

# 「……とは何であるか」という問いと「何が……であるか」という問い\*

——『ヒippiアス (大)』287c8-e4——

湯本 泰正

## はじめに

ソクラテスが「……とは何であるか」(この問いにおいて問われているもの、つまり……の部分に充当されるものは〈徳〉、〈正義〉、〈勇気〉、〈節制〉、〈敬虔〉等である)と問うた時<sup>1)</sup>、多くの場合<sup>2)</sup>対話相手はこの問いの意味、即ちこの問いが答えとして如何なるものを求めているかを理解しない。彼らの不理解にはその理由があると考えられる。それはつまりこの問いが彼らにとって馴染みのないものである<sup>3)</sup>という事とこの問いが答え

\* ) 註において参考文献を引用する際には、著者名、出版年、必要な場合にはページ数でそれを示します。著書名等については末尾の参考文献の項をご覧ください。)

1) 初期対話篇のうち『ラケス』、『カルミデス』、『エウテュプロン』でそれぞれ〈勇気〉、〈節制〉、〈敬虔〉の「何であるか」が問われ、これらの問いをめぐる問答がその内容の中核を成す。『メノン』と『国家』第一巻も途中まで類似な構造を持っており、それぞれ「〈徳〉とは何であるか」、「〈正義〉とは何であるか」が問われ問答が展開する。『リュシス』も同じグループに属する対話篇と解されることもあるが (Guthrie, 1975, p.70 や Kraut, 1984, p.245, 脚註1を参照)、この対話篇では「〈友愛〉とは何であるか」ではなく「友愛がどのように成り立つか」をめぐる問答がその中核を占めるので、上述の対話篇のグループとは性格を異にする (この点については Robinson, 1953<sup>2)</sup>, p.49; Kahn, 1981, p.316; Sedley, 1989 も参照)。『テアイテトス』も、初期対話篇ではないが、これらの対話篇と似た構造を持つ。

2) 例えばラケス、エウテュプロン、メノンの場合。一方クリティアスやポレマルコスはこの問いの意味に関して或る理解を持っている。

3) ソクラテスから問いの意味の説明を受けた時の対話相手の当惑、例えば『ラケス』191c7-e12, 『メノン』72c6-d3, 等参照。前註で言及したソクラテスと親しいクリティアスとポレマルコスが問いに或る理解を持っていた、つまりソクラテスが彼らに対してはわざわざ問いの意味を説明していない、という事実は他の人々にとってはこの問いが馴染みのないものであったという事を逆照射している。

として何を求めているかに関して曖昧さを残している<sup>4)</sup>という事である。ソクラテスは彼らの理解を助けるために、この問いを類似な問いと区別したり、この問いの意味を説明したり<sup>5)</sup>、範例を挙げたりしている<sup>6)</sup>。

ソクラテスの「何であるか」の問い（以下『「……とは何であるか」という問い』をこのように略記）に対する対話相手の不理解・誤解に関しては、例えばJ. バーネットは彼らの誤解の内容を「普遍 (the universal) と個別 (some particular) の混同」と述べている<sup>7)</sup>。「何であるか」の問いは普遍を求めているのに、対話相手は個別を挙げているとする解釈である。この伝統的解釈は現在でも一般に受け入れられているが、近年挑戦も受けた。それは対話相手が決して具体的個物を挙げているわけではないと主張する<sup>8)</sup>。この挑戦は研究者の注目を集めているが<sup>9)</sup>、個々の事例に即して言えば行き過ぎも含んでいるように思われる<sup>10)</sup>。

本小論は対話相手の一人ヒippiアスの「何であるか」の問いに対する理解と不理解の解明を通して、ソクラテスの問いの意味の究明に努める。問いに対するヒippiアスの理解と不理解を解明するにあたっては、今触れた事柄、「何であるか」の問いの性格や対話相手の誤解の内容、が主要論点となる。結論に関して言えば、それは肯定形ではなく否定形で述べられるので、この小論は「何であるか」の問いの意味の究明という課題への助走にすぎない。

プラトンの対話篇の意義は、E.ティガーステッドが言うように<sup>11)</sup>、二重の対話であるというところにある。ソクラテスとその対話相手の間の対話であるばかりでなく、著者プラトンと私たちの間の対話でもある。プラトンと対話するためには、プラトンが何故現に書かれてあるように書いた

4) この点に関して現代の研究は主に、「何であるか」の形の問いは「何故であるか」や「何処であるか」に較べてその可能な答えがより限定されていないこと、を強調している。例えばRobinson, op. cit., p.59, またSantas, 1979, p.77も参照。

5) 『ラケス』191a1-e11, 『エウテュプロン』6d6-e6, 『メノン』72c6-73c8等。

6) 『ラケス』192a1-b3, 『メノン』74e11-76a7等。

7) Burnet, 1924, p.32. Tarrant, 1976, p.47も参照。

8) Nehamas, 1975. この主張についてはp.289参照。

9) 例えば Woodruff, 1982, pp.50-1; Benson, 1990.

10) この論点に関しては註28を参照。

11) Tigerstedt, 1977, p.98.

のかを、ソクラテスの述べていることばかりでなく対話相手の言動をも含めて、常に問題意識の中に置いておかなければならないであろう。このような問題意識に基づいたプラトンの対話篇へのアプローチは、別々の対話篇からソクラテスの言説を寄せ集め、ソクラテスの哲学或いはプラトンの哲学を構成するといったやり方とは自ずと違った結果をもたらすであろう。

## I 問 答

『ヒippias(大)』<sup>12)</sup> 287c8-e4はソクラテスが「何であるか」の問いを他の類似な問いと区別し、それらの違いそのものを問題にしている唯一の箇所である<sup>13)</sup>。この箇所でヒippiasは「〈美しいもの〉 (=〈美〉) とは何であるか」<sup>14)</sup> という問いと「何が美しいか」という問いの違いを正しく理解していないように見える。しかしこの誤解が、伝統的解釈が主張するよう

12) 『ヒippias(大)』はプラトンの真作かどうかについて現在においても研究者の間で意見の一致をみない数少ない対話篇の一つである。本小論はこの真偽問題を扱うものではないがここで一言。G. グルーベ(Grube, 例えば1926)とD. タラント(Tarrant, 例えば1927)の論争以来特に英語圏では真作とみなす学者がますます増える傾向にある(例えばDodds, 1959, p.7, 脚註2; Hoerber, 1964, pp.143-4; Malcom, 1968, p.189; Guthrie, op. cit., pp.175-6; Woodruff, op. cit., pp.94-105, 英語圏ではないがSoreth, 1953, 特にS.63-4)。しかし英語圏にあってもC. カーン(Kahn, 1985, pp.267-73)やH. シェスレフ(Thesleff, 例えば1989, pp.7-8, 20, 22-3)は真作説に反対している。ただこの二人の間でも著作年代に関して隔たりがあり、またシェスレフは彼独自の擬似真作説(the theory of semi-authenticity)を提唱し、『ヒippias(大)』ばかりでなく一般にその真作を疑われていない『クリトン』、『ラケス』、『エウテュブロン』もこれに含めている—ただしこの擬似真作説はシェスレフも認めているように一般に受け入れられるところとはなっていない。最近のコンピュータを使った文体分析も真作説を支持するデータを提出している(Ledger, 1989, pp.156-7)。もしこの小論で論じている箇所に基づいて主観的見解を述べるのが許されるならば、たいへんよく考え抜かれており、プラトン以外の著者を想定するのは合理的ではないと思われる。

13) 「何であるか」の問いと類似な問いが並び立てられている箇所は他にも色々あるが、それらの箇所ではこの二つの問いの違いを前提として、別の事柄が問題とされている。例えば『ヒippias(大)』286c8-d2, 『メノン』71b3-4。

14) ここで「美しい」と訳した古代ギリシア語 *καλός* は最も一般的な賞賛の言葉であり、日本語訳よりはるかに広い意味を持つ。つまり機能に関して審美的場面でも倫理的場面でも用いられうる。「素晴らしい」と訳するのが原語に一番忠実かもしれないが、小論で論じる箇所では審美上のもののみが対象なので、「美しい」と訳した。このギリシア語の意味についてはDodds, op. cit., pp.249-50; Adkins, 1960, pp.30-1, 179-85; Hoerber, op. cit., pp.151-2等参照。また問い *τί ἐστι τὸ καλόν* は「〈美〉 とは何であるか」と訳するのが最良であるが、ヒippiasの理解と誤解を跡付けるため、以下「〈美しいもの〉 とは何であるか」と訳す。

な、「普遍と個別の混同」であるかどうかは検討を必要とする。伝統的解釈に従えば<sup>15)</sup>、前者の問いは普遍を求め、後者の問いは個別を求める。だがヒippias自身は両者の違いを了解したと言っている——そうプラトンは書いている——のである。ヒippiasは問いをどう理解し、何を理解できなかったか。ソクラテスはこの誤解に基づくヒippiasの返答をどのように反駁しているのか。プラトンはヒippiasの理解と無理解を、そしてまたヒippiasの返答に対するソクラテスの吟味を描くことによって、この問いの独自の意味を説明しているように思われる。この箇所の問答を次に挙げよう。

ソ：「美しいものもまたすべて〈美しいもの〉によって美しいのではありませんか」。

ヒ：そう、美しいものによってだ。

ソ：「それが或るもので少なくともあることによってですか」。

ヒ：或るものであることによってだ。そうでなくて他の何によってでありえようか。

ソ：「それでは言ってください、客人よ」と彼<sup>16)</sup>は言うでしょう、「その〈美しいもの〉とは何であるかを」。

ヒ：すると、ソクラテス、そう尋ねている者は他でもない何が美しいかを知りたいのだね。

ソ：私はそうは思いません。そうではなく、〈美しいもの〉とは何であるかを知りたいのだと思います、ヒippias。

ヒ：しかし、それとこれとどう違うのかね。

ソ：あなたは全然違わないと思うのですか。

ヒ：そう、全く違わないからだ。

ソ：その通りなんでしょう、当然あなたの方がよくご存知でしょうから。それでもですね、よく考えてみてください。彼があなたに尋ねているのは何が美しいかではなくて〈美しいもの〉とは何であ

15) Tarrant, 1976, p.47を参照。

16) ソクラテスはヒippiasとの対話でいわゆる仮面のソクラテスを工夫しているが、両者の区別はこの小論で扱うテーマに係わらないので、以下この区別を無視する。

るかなのですから。

ヒ： 分かったよ，君，それではまさしく，美しいものとは何であるかを彼に答えるとしよう。それで私は反駁されることは決してあるまい。というのも，ソクラテス，いいかね，もし本当のことを言わなければならないとしたら，美しい乙女というものが美しいものなのだ。

上のソクラテスとヒッピアスの遣り取りで注目を引くことは，ヒッピアスが初め「〈美しいもの〉とは何であるか」という問いと「何が美しいか」という問いの違いを認めていなかったのに，ソクラテスにその違いを再度示唆されると，その区別を受け入れ前者の問いに答えている（と少なくとも彼の側ではそう主張している）ことである。プラトンはソクラテスとヒッピアスとの問答をこのように記すことによって，私たちに何を語ろうとしているのか，この問答の特異点，ヒッピアスの変心に考察の焦点を合わせよう。ヒッピアスの変心に関しては次の三つの解釈が可能であろう：

- a. ヒッピアスはかなりあからさまな違いに気付かないほど実際は愚かであるが，ここではその違いを理解した振りをしているのにすぎない<sup>17)</sup>。
- b. ソクラテスが区別を主張するから従ったままで，ヒッピアスは自己自身の見解を何等持たない軽薄な人間である<sup>18)</sup>。
- c. 二つの問いの区別は一般の理解ではかなり曖昧であり，ヒッピアスも最初両者の違いを見出せなかったが，「分かった」と言った時何らかの違いを把握していたのである。しかしこの理解に基づいた返答も，不十分で，ソクラテスの反駁を受けることになる。

これらの解釈の可能性を検討するためには，プラトンのヒッピアス描写，それぞれの問いの意味，ヒッピアスの返答を考察する必要がある。プラトンがヒッピアスにどのようなことを為させ言わせているかを先ず検討しよ

17) タラント女史は著者がヒッピアスを遣りすぎるほど愚か者に描いていると解し，このような著作態度はプラトンに相応しくないとする（Tarrant, 1976, pp.xxix-xxx, 47参照）。カーンも同様の見解を持つ（Kahn, 1985, pp.272-3）。

18) Woodruff, op. cit., 例えばpp.131-2参照。

「…とは何であるか」という問いと「何が…であるか」という問い 25

う。プラトンは序幕的会話<sup>19)</sup>のなかでヒippiアスの法についての観念が大多数の人のそれであることを、ソクラテスとヒippiアスとの問答を通して、露顕させている(284d1-e4)。更にヒippiアス自身も「何であるか」の問いに対する最初の自分の返答について「反駁されることはない、すべての人にそう思われていることだから」(288a3-4)と主張し、また三番目の返答に関しても「それはすべての人にとって美しいと思われるものだ」(292e4-5)と言ひ、自己の答えの正しさの根拠を二度も強調している。このように対話相手が「何であるか」の問いに対する自己の返答の根拠を強調する例は、少なくとも初期対話篇のうちには<sup>20)</sup>、見出せない。プラトンのヒippiアス描写には特別な意図があるように思われる。つまりプラトンはヒippiアスを一般の人々の代表あるいは傀儡として描いているのである<sup>21)</sup>。もしこの解釈が正しいならば、上述の解釈の可能性のうち初めの二つは放棄されなければならないであろう。ヒippiアスが一般大衆の代表であれば、全くの愚か者とはいえないだろうし、一般大衆の意見に従うのであれば、自己の判断の規準を持つことになり、さほど軽薄ともいえないからである。しかしこのように言うことは主観的にすぎるかもしれない。次に問いと問いに対するヒippiアスの返答を検討することによって三番目の可能性を追求しよう。そうして結果として初めの二つの解釈は支持されないことを示そう。その際ヒippiアスが二つの問いは「全く違わない」と言った時、それらをどう理解していたかということと「分かった」と言った時、両者にどのような違いを認めたかということの両方を論点とする必要があるだろう。プラトンはヒippiアスの変心をこのように描くことによって「何であるか」の問いの独特な性格を暗示している、と思われるからである。

## II 問 い

19) プラトンの各対話篇は通常主題を論ずる対話の前に序幕といった部分を持つ。この序幕的会話の中で普通登場人物の口を通したりその振る舞いの描写によって対話がどのような場所でどのような状況で為されるかや登場人物がどのような人であるかが示される。『ヒippiアス(大)』ではこの部分は281a1-286c3である。

20) 註1で言及した対話篇を参照。

21) Crombie, 1964, p.44に同様な見解が暗示されているように思われる。

問い「〈美しいもの〉とは何であるか」(*τί ἐστὶ τὸ καλόν;*) と問い「何が美しいか」(*τί ἐστὶ καλόν;*) の違いは統語論上中性形容詞 *καλόν* の前に定冠詞 *τό* が有るか無いかだけである。定冠詞の付いた形容詞は名詞化されるから<sup>22)</sup>, *τὸ καλόν* という表現は美しくある何らかのものを指す。さらに定冠詞には次のような二つの基本的用法がある<sup>23)</sup>:

1. 定冠詞は他の同種のものから区別されたものとしての個々のものを指す場合に用いられる。特に、よく知られたもの、すでに言及されたもの、その場において聞き手や読者に容易に同定できるものを指す場合に用いられる。この場合 *τὸ καλόν* は例えばテーブルの上に見える花瓶に生けられたバラの花やカッサンドラを指し、他の「美しいもの」例えば垣根のバラの花やヘレネと区別される。
2. 他の異種のものから区別し同種のもを全体として指す場合に用いられる。単数形は一つが同種のもの全体を代表し、複数形は同種のもの全てに言及していると考えられる。こちらの用法にあって *τὸ καλόν* は個々の美しい花や乙女を内包し、例えば「醜いもの」に対立する。

この問答にあっては *τὸ καλόν* が最初の用法において使用されているのではないことは、ヒippias にとっても、明らかであろう。なぜならこの語句によってそれまでに言及されているものは何もないし、ヒippias の誤解が結果として示しているように、この語句が言い表しているものはよく知られたものでも容易に同定されうるものでもないからである。従ってヒippias は問われているもの *τὸ καλόν* をこの第一の用法を持つものと理解したわけではない。更にまたこう理解して返答したわけでもない。

第二の用法に従えば表現 *τὸ καλόν* は美しいもの全体を代表している。つまり様々な美しいものをこの表現のよって代表しうるのである。例えばソクラテスはヒippias の返答に対して次のように言って反駁を始める:

「では美しい牝馬というものは美しくはありませんか。……ヒippias ス……牝馬も、美しいのは、美しいと言うほかないのではありませんか。」

22) Kühner u. Gerth, 1898<sup>3</sup>, I, S.594; Smyth, 1956, p.292参照.

23) Kühner u. Gerth, op. cit., S.589-90; Smyth, op. cit., pp.286-8参照.

「…とは何であるか」という問いと「何が…であるか」という問い 27

というのも美しいもの (*τὸ καλόν*) が美しくないとあえて否定することがどうしてできるでしょうか」(288b8-c3)。

ここで *τὸ καλόν* はソクラテスによって「美しい乙女」や「美しい牝馬」の代わりにそれらを代表する表現として使われている。またこの *τὸ καλόν* は288e1-2では *καλὸν ὄν* という語句に置き換えられていて、こちらの語句は「美しくあるもの」を意味し、そこでは「美しい豎琴」(c6) と「美しい鍋」(c10-11) を含む。

これらの箇所ではソクラテスは *τὸ καλόν* の基本的用法を示し、更にこれを他の語で言い換えることによってその意味を説明している、と解される。ソクラテスにこのような仕方では「何であるか」の問いに対する返答の反駁を始めさせているのは、プラトンが問われているものを表現している *τὸ καλόν* の基本的用法を説明し、問われているものは実はそれとは違う独自の意味を持つことを暗示するためではないか。

もし問われているもの *τὸ καλόν* がこの基本的用法において理解されたならば——そしてこのような文脈で了解されるもっとも一般的な用法であるからそれは当然なことであるが——問い *τί ἐστὶ τὸ καλόν* と問い *τί ἐστὶ καλόν* の区別は微妙になってくる。後者の問いは「美しいもの」を一つ挙げることを求めているが、「美しいもの」の一つにすぎないものが、問われた者にとっては、「美しいもの」を代表すると心理的に思われる場合もありうるからである。例えばラケスはソクラテスに「〈勇気〉とは何であるか」と問われて、「戦列に踏みとどまり、敵を防ぎ逃げようとしないこと」(『ラケス』190e5-6) と答えている。歴戦の猛将であるラケスにとってこの答えはまさに勇気を代表するものであり、他に答えは考えられなかったであろう。しかしソクラテスが明らかにしているように<sup>24)</sup>、それは勇気ある行為の一例にすぎない。

ヒippiアスが問われているもの *τὸ καλόν* を上述の用法において把握したならば、二つの問いを区別することは難しい。ヒippiアスが両者の問いは「違わない」と最初言ったのも理解できる。ここに、即ち実例を求める問いとの区別がはっきりしないというところに、「何であるか」という問

24) 『ラケス』191a1-e7参照。これらの箇所では、厳密に言えば、勇気ある行為でなく勇気ある人が言及されているが。



いの少なくとも一つの曖昧さがある<sup>25)</sup>。一方ではまた問われているものが基本的用法に基づいては理解しがたいところにソクラテスの「何であるか」の問いの独自性もある。プラトンはここで類似した二つの問いを対話者に述べさせ、両者の違いをソクラテスの口を通して暗示しているが、それは「何であるか」の問いに曖昧さを認め、実例を求める問いでないことを明白にし、この問いに対する誤解を解こうとしている、と同時にソクラテスの問いの独自性をも示唆しているのである。

問われているもの *τὸ καλόν* が独自の用法を持つことはそれを表現する仕方にも現れている。独自の用法と一般的な用法を区別しなければならない場合は後者に複数形が用いられ、例えば287c8-d1では *τὰ καλὰ πάντα τῷ καλῷ ἐστὶ καλά* (「美しいものはすべて〈美しいもの〉によって美しい)」と述べられている。また独自の用法を強調するためにしばしば *αὐτό* や *αὐτὸ καθ' αὐτό* が付け加えられ、例えば286d8-e1では「何であるか」の問いは *αὐτὸ τὸ καλὸν τί ἐστὶ* (「〈美しいもの〉 そのものとは何であるか)」と表現されている<sup>26)</sup>。つまりこうした言葉遣いによって「何であるか」の問いにおいて問われているものが独自の意味を持っていることを示そうとしているのである。

### III 返 答

ヒippiアスの返答「美しい乙女というものが美しいものである」(*ἐστὶ ... παρθένος καλὴ καλόν*) において特徴的なことは、女性名詞の主語に対して述語形容詞が中性単数形となっていることである。このような場合、即ち述語形容詞が主語の性と数に一致せず中性単数形をとる場合は主語は個々のものではなく個々のものの全体を言い表す<sup>27)</sup>。従ってヒippiアスの返答は個々の美しい乙女、例えばカッサンドラに言及し「カッサンドラは美しい」という意味ではなく、美しい乙女全部に言及していて、意識

25) 註4を参照。

26) 『ヒippiアス (大)』288a9, 289c3, d2, 292d3-4; 『メノン』100b6も参照。更に『エウテュプロン』6d10-11, e3も参照。

27) Smyth, op. cit., pp.276-7参照。

すれば「美しい乙女は誰でも、例えばカッサンドラもヘレネも、美しい」となる<sup>28)</sup>。従ってヒippiアスのつもりではこの返答で「何が美しいか」の問いに答えているのではないことは明らかであろう。なぜならこの問いは個々の例を一つ挙げることを求めていると解されるが、ヒippiアスの返答は個々の乙女ではなく美しい乙女全体に言及しているから。これがヒippiアスが「美しいものとは何であるか」の問いと「何が美しいか」の問いに違いを認め、後者の問いではなく前者に答えると言ったことの原因である。またこの答えが言及している全体性は、部分的にはあるが、「〈美しいもの〉とは何であるか」の問いにおいて問われているものを言い表している表現 *τὸ καλόν* の指示する全体性に対応している。このことも、「〈美しいもの〉とは何であるか」の問いの曖昧さを考慮に入れれば、ヒippiアスがこの問いに答えると言ったことの論拠になりうるであろう。

しかしながらソクラテスの吟味は「美しい乙女」が「何であるか」の問いによって求められているものではないことを明らかにする。この吟味において「美しい乙女」も、「美しい牝馬」や「美しい豎琴」と同じく、「美しいもの」の一部にすぎないことが示される (288b8-e9)。もし「美しいもの」の部分が、個であっても種であっても、「美しいもの」の一つだとすれば、この「美しい乙女」も「美しいもの」の一つである。こう主張するのもあながち不当なことではないだろう。「美しい乙女」も「美しい」と正しく言われているのだから。こう考えるとヒippiアスの返答は実は「何が美しいか」の問いに答えているとも言えるのである。「何が美しいか」と問われて、「美しい乙女がそうだ」と言うのは正当な答えであろう。「美しい乙女」は、個に言及しようと種に言及しようと、「美しい」と言われうるのだから。

つまりヒippiアスの返答は、「何が美しいか」の問いが個の実例を要求していると解せば、この問いに答えるものではないが、何であれ「美しい」と言われるものを挙げることを求めていると理解すれば、この問いに答え

28) A. ネハマスはこのヒippiアスの返答が“Being a beautiful maiden is what it is to be beautiful”を意味すると解釈する (Nehamas, op. cit., p.300), そしてヒippiアスは個別を挙げていないと主張している。この超近代的な解釈は、ヒippiアスを一般大衆の代表と看做す本小論の見方からは到底受け入れられない。またこのようにヒippiアスの返答を解釈する必要もない。

ている。しかし無論ソクラテスの「何であるか」の問いには答えていない。

類似した二つの問いを区別しヒippiアスの返答を反駁することによってプラトンが示そうとしているものは何か。それは「何であるか」の問いが求めているものは問われているもの——このものの身分はまだ明確ではないが——の实例，言い換えると通常の意味で「美しい」と言われるものではないということである。「通常の意味で」と断り書きを付け加えたのは、「美しいもの」の例は当然「美しい」と言われるが，ソクラテスによって，問われているものもまた「美しい」と主張されていて，ただしそこでは「すべての人にとってかつ常に美しい」と述べられているからである(292e2)。「美しいもの」の例が「すべての人にとってかつ常に美しい」ということはないであろう。

また問われているものの身分を言い表している定式「美しいものもまたすべて〈美しいもの〉によって美しい」も以上の主張を支えるであろう。「美しいもの」の例はこの定式を満たさないからである。この定式は次のように一般化して論理化されうる——それはつまりわれわれにとって意味の解るものとなる：

すべての  $x$  は  $Y$  であることによって  $X$  である。

ここで  $x$  は個々のもの， $X$  は「何であるか」の問いにおいて問われているもの， $Y$  はその答えにおいて答えているものを表す。問いは「 $X$  とは何であるか」，答えは「 $X$  とは  $Y$  である」という形を取る。 $X$  の实例はこの定式を満たさないであろう。例えば「カッサンドラは美しい乙女であることによって美しい」と言えても、「バラの花は美しい乙女であることによって美しい」と言うのは意味をなさない。このことをクラス論理的に解釈して理由付ければ，全体の部分にすぎないものがその全体の如何なる部分をも含むうるといふ事は有り得ない，となるであろう。

## 結 び に

以上の考察は，ソクラテスの「何であるか」の問いが求めているものは問われているものの实例——個であろうと種であろうと——言い換えると通常の意味で「美しい」と言われるもの即ち「美しいもの」ではない，と

いうことを明らかにした。ところでこの考察に対しては次のような批判が提出されるかもしれない。たとえ結論自体を疑わないとしても、この考察で指摘されているような「何であるか」の問いの曖昧さは、他の対話篇では、多くの場合問われているものが定冠詞プラス形容詞ではなく名詞で表現されているので、問題にならないのではないか。例えば『ラケス』では〈勇氣〉の「何であるか」が問われ、『メノン』では〈徳〉の「何であるか」が問われているが、問われているもの、〈勇氣〉と〈徳〉、はそれぞれ名詞形の *ἀνδρεία* と *ἀρετή* で表現されているので、それは当然抽象概念であって、実例を指してはいないから、これらの問いにはこの考察で説かれているような曖昧さはないのではないか。しかしながらこの批判はギリシア語の名詞の用法を無視した見解である。ギリシア語の *ἀνδρεία* や *ἀρετή* のような（訳せば抽象概念を表すような）言葉は抽象も具体も表現しうるのである<sup>29)</sup>。むしろこれらの語にあっては抽象と具体といった区別はなかったと言うほうが正確かもしれない<sup>30)</sup>。現にラケスもメノンもそれぞれ「何であるか」と問われて、個々の例を挙げているのである<sup>31)</sup>。問われているものが名詞で表現されている「何であるか」の問いも、『ヒippias (大)』の場合の問いと同様に、上述の曖昧さを残しているのである。ただそれらの場合にはこの曖昧さ自体が問題化されているわけではない、というだけである。

この考察は、ソクラテスの「何であるか」の問いが求めているものは通常の意味での「美しいもの」ではない、と主張した。では何が求められているのか。ソクラテスは問われているものを *ἰδέα* 或いは *εἶδος* という語を使って表現したり、様々に説明している。これらの論点の解明が必要であるが、そのためには稿を改めなければならない。

## 参 考 文 献

Adkins, Arthur W. H., 1960, *Merit and Responsibility*, Oxford.

29) Kühner u. Gerth, op. cit., S.589-90参照。

30) プラトン研究に出来合いの近代的概念の枠組みを利用することには慎重でなければならない。少なくともそのことを検討した後でなければならないであろう。

31) 『ラケス』190e5-6; 『メノン』71e1-72a5参照。

- Benson, Hugh H., 1990, "Misunderstanding the 'What-is-F-ness?' Question", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 72, pp.125-142.
- Burnet, John, 1924, *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, and Crito*, Oxford.
- Crombie, I. M., 1964, *Plato: The Midwife's Apprentice*, London.
- Dodds, Eric R., 1959, *Plato, Gorgias*, Oxford.
- Grube, G. M. A., 1926, "On the Authenticity of the *Hippias Maior*", *Classical Quarterly* 20, pp.134-148.
- Guthrie, W. K. C., 1975, *A History of Greek Philosophy*, v.4, Cambridge.
- Hoerber, Robert G., 1964, "Plato's Greater *Hippias*", *Phronesis* 9, pp.143-155.
- Kahn, Charles H., 1981, "Did Plato Write Socratic Dialogues?", *Classical Quarterly* 31, pp.305-320.
- , 1985, "The Beautiful and the Genuine: A Discussion of Paul Woodruff, *Plato, Hippias Major*", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 3, pp.261-287.
- Kraut, Richard, 1984, *Socrates and the State*, Princeton.
- Kühner, R. u. Gerth, B., 1898<sup>3</sup>-1904<sup>3</sup>, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache: Satzlehre*, 2 Bde., Hannover.
- Ledger, Gerard R., 1989, *Re-counting Plato: A Computer Analysis of Plato's Style*, Oxford.
- Malcom, John, 1968, "On the Place of the *Hippias Major* in the Development of Plato's Thought", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 50, pp.189-195.
- Nehamas, Alexander, 1975, "Confusing Universals and Particulars in Plato's Early Dialogues", *The Review of Metaphysics*, 29, pp.287-306.
- Robinson, Richard, 1953<sup>2</sup>, *Plato's Earlier Dialectic*, Oxford.
- Santas, Gerasimos X., 1979, *Socrates: Philosophy in Plato's Early Dialogues*, London.
- Sedley, David, 1989, "Is the *Lysis* a Dialogue of Definition?", *Phronesis* 34, pp.107-108.
- Smyth, Herbert W., 1956, *Greek Grammar*, Cambridge, Massachusetts.
- Soreth, Marion, 1953, *Der platonische Dialog Hippias Maior*, München.
- Tarrant, Dorothy, 1927, "The Authorship of the *Hippias Maior*", *Classical Quarterly* 21, pp.82-87.
- , 1976 (reprint of the 1928 ed.), *The Hippias Major attributed to Plato*, New York.
- Thesleff, Holger, 1989, "Platonic Chronology", *Phronesis* 34, pp.1-26.
- Tigerstedt, E. N., 1977, *Interpreting Plato*, Stockholm.
- Woodruff, Paul, 1982, *Plato, Hippias Major*, Oxford.

(附記：本小論の論点の多くはギリシア語で書いた学位論文，特にその第一章第2節に基づいていますが，今回新しい見解も提出しました。また独立した論文にまとめるにあたり，立論のたて方，考察の展開の仕方は変えました。)